

むらの民俗知を生かし新たに交流・関係する人たちによる再創造 —釜沼北民俗誌序説（2）—

和田 健

千葉大学大学院国際学術研究院

Recreating the folk custom of the village by the exchange population/related
population: An ethnography of Kamanuma Kita, part2

WADA Ken

要旨

本稿は、新しく移住した住民による旧来の村落社会における民俗知、生活知とそれに関わるヴァナキュラーな言語の再発見と活用に基づいた、新たなコミュニティづくりについて報告する。すでに過疎化が急激に進み、旧来より住まうむらの社会関係は消失している。しかし、そのむらにおいて、かつてどういう社会関係が存在していたのか、そして日常で使われていた生活知そしてそれに関わるヴァナキュラーな言語をたどっていく作業を行うことの意味を考えたい。かつて使われていた屋号を活用した古民家の活用により、ランドマークの再認識については、別稿で記した（和田 2022）。本稿で対象とする釜沼北集落で、もはや入らなくなったヤマに存在する石祠「御伊勢様」に行く参道の整備、茅葺き屋根の記録をもとにした古老の記憶を聞き取りする大学生など、もとの釜沼北集落のコミュニティのあり方を再発見し、再創造する道筋について、交流人口、関係人口そして移住者の交流を促すきっかけについて報告したい。

キーワード

ヴァナキュラー、民俗知、関係人口、交流人口、移住者、再創造

1. はじめに—現在の関係性を構築するために遡り再発見する民俗慣行—

刷新される関係人口のあり方と旧来のむら社会 本稿は新しく移住した住民による旧来の村落社会関係の再発見と活用に基づいた、新たなコミュニティづくりについて報告するものである。すでに報告をした拙稿「移住者によって創造されるむらの協業関係—釜沼北民俗誌序説（1）—」[和田2022年 以下「序説（1）」と記す]の続編にあたる。

農山村の過疎化の課題がいわれて久しいが、常に同じ状況の過疎が現在まで変わらずつづいているわけではない。2020年代現在においては、旧来よりのむら組織の運営が、もとより住まう住民中心による運営から、いかにむらの外にいる人がむら社会の中に入り協業していくかが課題である。むら内にいる旧住民と、むら外から来る新住民のボーダーを意識する視点は重要だが、もはや新旧両住民が、居住空間であるむらという場を再創造していく精神的な支柱が必要である。特に新住民が旧来のむら組織にあった、民俗慣行を意識し、再創造していくことがひとつのきっかけとなる¹。本稿で対象としている千葉県鴨川市釜沼北集落もそのひとつである。

すでに過疎化が急激に進み、旧来の住民によるむらの社会関係は消失している。寄合の運営、農家組合の運営から祭礼組織の維持まで、90歳代の旧住民が多くいる釜沼北集落においては、新しい展開が必要になっている。しかし、そのむらにおいて、かつてどういう社会関係が存在していたのか、そして日常で使われていたことば（ヴァナキュラーな言語）をたどっていく新たな関係人口、交流人口にあたる人たちの活動もあわせてみていきたい。

屋号を活用した古民家の活用により、ランドマークの再認識を旧住民、新住民そして釜沼北を訪れ交流する人たちすべてが空間認識することは別稿で記した。本稿では、事例を加えて、もはや入らなくなった集落所有であった森林に存在する山の神様である御伊勢様に行く道の整備、茅葺き屋根の記録をもとにした古老の記憶の聞き取り調査を行う大学生など、もとのコミュニティのあり方を再発見、再創造する道筋をたどり、新しい移住者、むらを訪問する人たちによる交流のきっかけを作っている。

本稿で示す事例が、農山村の活性化を促す普遍的なモデルケースとはいえないが、旧来のむらをベースにしたコミュニティを再発見する方法は、移住する側、そして受け入れる側の関係を構築する何かしらのヒントになろう。本稿では、その報告をもとに今後のあり方を提示することにした。

さて、地域振興の文脈で農山村における移住者、つまり移住人口を考える場合、農山村に交流する機会のある交流人口そして移住に至るまで、繰り返しその地域に関わる関係人口のあり方を考えることも大事である²。すでに経済地理学関係の研究でも議論されているように、いきなり移住に至るまでにまずは交流する、そして1回限りではなく農山村のコミュニティに、繰り返し訪問しながら関係性を作り上げ、そして移住という決断に行く道筋は重要である。本稿では、関係人口のあり方から旧来の民俗慣行を今一度見直すことの効果について言及していくこととしたい。現代の活動でも、過去のあり方を縁取りなが

ら、むらの開発に取り組もうとしている移住者、そして関係人口にあたる深い関わりを持つ人々、そしてその前段階にあたる交流人口にあたる地域に関心があり訪問してくる人たちにとって、旧来のむら組織で行われていた民俗慣行がどのような効果をもたらすか。大きく変貌する2020年代の地域交流のあり方について見ていきたい。

2. 釜沼北集落のさまざまな民俗慣行と交差する関係人口としての大学生

関係人口として関わる大学生 本項では、大山におけるさまざまな伝承されてきた生活文化に対し、関係人口である外から来た人たちの関わりについて言及したい。特に大学生が、釜沼北そして大山という農山村にいかに関わっていくかの事例を通じて考えていきたい。定住でもなく移住でもなく、そして観光でもない。農山村の中に入っていきそして少し深く関わる、何度も行き交う「旅」を通じた関わりの可能性について考えていきたい。

大山不動尊の祭礼と釜沼 「序説(1)」で鴨川市の中山間地域にあたる「大山」地区の概要については述べたので、ここでは釜沼北集落が、大山の中で関わる現在の状況について触れておきたい。まず大山地区は、釜沼(北、南あわせて)含めて6つの旧村(集落、現在では「区」と呼ぶ)³で構成されており、それぞれ旧村単位での祭礼が存在するが、大山が一体となって行われるものとして、大山不動尊の祭礼がある。大山地区全体で祀られている高蔵神社の下に大山不動尊(大山寺)⁴が立地する。ここしばらくは原則8月第一土曜日に開催される6つの旧村が参加する大山地区全体の祭礼である。

高蔵神社では、6つの旧村を4つの区-平塚区、金東区、古畑・奈良林区そして佐野・釜沼区に分けて、総代と世話人を出している。6つの区単位で行うものに、祭典費・初穂料のとりまとめ、そして神社周辺の清掃、草刈りがある。各区の世話人が中心となって、祭礼を担う人手を確保し、おおよそ祭礼の前日をめどに実施する。また祭礼の当日は、神輿を担ぐことや当番の区がある集落の神社氏子による神楽奉納が行われる。釜沼区にある日枝神社氏子による神楽奉納は、平成30年および令和4年に行われている。

祭礼の日、朝7時台から大山地区各集落は、活動を開始する。各集落の神社の



【写真1】釜沼北集落の屋台(林良樹氏から提供)

祭礼も同時に行われるが、それぞれの神輿を高蔵神社に集結させる。大山不動尊境内までの斜面は厳しく、各集落の神社から神輿を担ぎ、山手にある高蔵神社まで渡御するのは大変な労力であり、超高齢化が進む農山村ならば、いかに担ぎきるかという問題に直面する。

大山の祭礼では、ここ数年、大学生が参加するPBL型実習などの地域活動の中で関わりを持った経緯から、神輿渡御への参加の声かけが行われることが多くなってきている。2021年（令和3年）には、千葉大学で関わっている実習授業「持続的地域貢献活動実習」において参加した学生が、金東区の神輿を担いで大山不動尊まで登り、終日神輿を担いでいた。この年、筆者は金東の祭礼世話人から電話を受け、学生何名かが前泊して祭礼に参加しないかというお誘いを受けた。世話人の方は、金東に移住されてきた方であるが、世話人として金東の寄合で、担ぎ手に大学生が関わってはどうかという提案をされ、受け入れていただいた。また釜沼においても、東京工業大学（現在、東京科学大学、以下調査時の名称であった「東工大」で表記する）の塚本由晴教授の研究室での活動に参加している多くの学生が関わり、神輿を担ぎ貢献している（【写真1～3】参照）。

祭礼は最終的に午後8時に旧大山小学校に6つの集落の屋台が集まり賑わう。

大山不動尊を核に、大山地区にある旧村である6つの集落（区）が集結する祭礼行事として、連綿とつづく祭礼であるが、近年特に2020年代において、祭礼運営における担い手として、大山地区外に住まう大学生など若い人たちの関わりが重要な存在となっている例といえる。

ヤマに存在した茅畑と茅無尽 農山村では集落に立地しているヤマ⁵、いわゆるむらの



【写真2】釜沼区神輿の担ぎ手である東工大（現：東京科学大学）の学生（林良樹氏提供）



【写真3】日枝神社での祭礼の準備（林良樹氏提供）

領域にある森林といかに関わるかが、2020年代の超高齢化した状況において、その活用に課題が生じる。釜沼区は、釜沼北集落では富津市と隣接している北側にヤマがあり、釜沼南集落では、嶺岡牧に隣接し館山市側に隣接して立地する。同じヤマでも資源的に特性が違い、南のヤマは嶺岡牧側の水源が豊富にあり、水田耕作で活用されている。北の場合、天水を活用する水田耕作が主であるが、ヤマには水源として長く山の神様として祀られており、御伊勢様と呼ばれている。ヤマ深い場所にあるところから、かつてはヤマを登って御伊勢様の石祠までたどる道には、夏場草が生い茂る。そこで先に記した日枝神社、大山不動尊の祭礼の前には御伊勢様に行く道筋の草刈り、コサギリをむらの協同労働として行っていた。現在では、同じ時期に協同して草刈り、コサギリをおこなっているが、御伊勢様までの道筋は、登らなくなったことから草刈りは行っていなかった。

もう1点、北のヤマには、かつて茅畑が存在し、茅を活用した茅普請が、北のなかで集落内を組み分けして、その単位で毎年協同で順繰りに行われていた。簡単ではあるが、その概要を記したい。

茅葺きの協同労働は、カヤムジン（茅無尽）あるいはムジン（無尽）といわれていた。釜沼北の中で、カヤグミ（茅組）を作っており、毎年一軒ずつ茅替えを行っていた。茅組は、昭和27年の出納帳によると、東組、西組のユニット単位で茅葺きのローテーションを組んでいた。現在集落運営の組は、荒砥組、五反目組は現存するが、東組、西組は存在しない。東組、西組は、集落運営のユニットであった可能性はあるが、この組がいかなる単位であったかを記憶している古老には出会えなかった。ホンガヤ（本茅）と呼ばれたものは、母屋を行う茅無尽である。コガヤ（小茅）と呼ばれたものは、牛舎、小屋、納屋などを行う。ホンガヤ、コガヤは、同じ年にひとつの家に対してホンガヤ、コガヤを行うのではなく、それぞれ別々のローテーションで行われるので、1年に2軒の屋根替えを行うことになる。

茅無尽を行う日は、茅組が早朝に茅畑に向かい茅を刈り、スペースのある斜面に広げて乾かして、屋根替えを行う家に持ち運んだ。この茅畑は2町歩あったといい、釜沼北集落にとっては、重要な共有地であり、茅が再生される資源のある場所であった。茅組は東組、西組それぞれ23、24軒でカヤムジンが組まれていたという。

柴崎五一さん宅に所蔵されている茅無尽の明細帳は、明治まで遡って所蔵されているが、昭和27年に茅無尽に参加した人たちへの飲食の詳細が記されている「志んのみ代」と記された明細帳を例に状況を簡単に記しておきたい。これは、茅無尽の組内の人たちや、外から雇った屋根替え職人そして若い人足たちに提供した食材が記された書き付けである。食材は、組内の家々はじめ近隣の家々からの持ち寄りのものもあり、誰が何を持ち寄ってくれたかもすべて記されている。しかしそれ以外にも魚を多く調達して、働いている人たちの食事で提供されている。「茅無尽の日はめったに食べられない魚を食べるのが楽しみ」といわれたようで、農山村である釜沼北のごちそうとして魚が語られていたという。

しかしながら、茅無尽は、集落の家が屋根瓦に変わっていく中で、少しずつニーズがな

くなる流れとなる。例えば現在民泊を行う古民家シタサン（屋号）の屋敷は、早い段階で瓦屋根になっていたの、茅組からはずれていったという。

この茅畑のあった釜沼北のヤマは、元上総山とも呼ばれ共有林であったが、地権者26名共同で売却をし、それで得た売却金と県からの補助、寄付金などを集めて平成5年4月に「釜沼北部集会所」を竣工させた。茅無尽のニーズもなくなり、また集落の北側にある比較的傾斜のあるヤマに出向くこともなくなりつつあったとき、釜沼北で集会所をもつことが話し合われて、県への売却を決定した。集落において、集会所、寄合の場を単独でもつことはとても重要である⁶。釜沼北部集会所は、日枝神社の祭礼の時には釜沼南とも共同で使う場ではあるが、釜沼北での寄合、農家組合の話し合いなどは行われる。集会所は北のものだが、日枝神社の祭礼の際には釜沼北集落と釜沼南集落双方（つまり釜沼区）で使用する。集会所は農家組合（釜沼北にある農家の組織体）で管理しており、寄合は毎月28日に行われている。現在では、釜沼区（釜沼北と釜沼南をあわせた行政区）の区長管理ではなく、釜沼北の農家組合長がすることになっている。

茅無尽の記憶を聞き取り、卒業論文を書く学生・被災した茅葺き屋根を復興することヤマを県に売却し、新たに釜沼北の集会所ができる展開になったと同時に、ヤマの存在も遠くなっていった。茅無尽もそして茅畑もなくなった。それから約25年の時がたち、ヤマをめぐる大きな変化が起こったのである。

釜沼北に深く交流し関わる東工大、塚本教授の研究室の学生たちを中心に、茅無尽に関わる記憶をもつ古老たちへの聞き取りを行い、卒業論文を作成している。茅無尽の際、茅畑から刈り取った茅をどう乾かして、ヤマから屋根替えをする家に持ち運んだか。どのくらいの手が必要であったかについて聞き書きを行い、また現存する茅無尽の書き付けの分析も可能な限り行っている。

「かつて茅畑があり、茅を使った屋根替えを行っていた。しかし今は行わない。」といった現状認識の中では、記憶の遙か彼方にあった生活の憧憬になってしまう。茅に対する関心については、2019年の房総台風により、多くの家の屋根が被災したことがきっかけとしてある。1999年に釜沼北に移住してきた林良樹氏の家「ゆうぎづか」も茅葺きであり、房総台風で大きな被害を受けた（【写



【写真4】 古民家ゆうぎづかの茅葺き屋根

茅葺き屋根は飛ばされたが、一般社団法人「小さな地球」が呼びかけて、茅葺きの技術を持つあるいは関心を持つ人たちが全国から集まり、時期を見て改修を行っている。葺き替えの技術を持っている人たちによると、それぞれの地域で葺き替えの方法や内部構造の仕組みに違いがあり、多様であるという。古民家として茅葺きが残っていたこともあるが、2019年房総台風のあとをきっかけに、改めて茅葺きの関心が高まったことも興味深い。（筆者撮影）

真4】参照)。茅葺きの屋根は暴風雨で飛ばされたが、林氏たちが運営する一般社団法人「小さな地球」を中心に、茅葺きの技術を持つあるいは関心を持つ人たちが全国から集まり、時間をかけながら時期を見て改修を行っている。林氏は、この茅葺き屋根の改修に関わるあり方を「新たなユイ」とよび、むらを越えた協業関係として位置づけている。また、全国から集まる葺き替えの技術を持っている人たちによると、茅の葺き替えの方法そして仕組みは多様である、と林氏という。「ゆうぎづか」が古民家として茅葺き屋根を残していたこともあるが、房総台風のあとをきっかけに、改めて茅葺きのありかたに関心が高まったことも興味深い。

ここで大きなポイントは、茅葺きという民俗技術、民俗知をベースにしながらも、農山村の今後を考える東工大の研究室に所属する学生が茅葺き屋根に深く関わり、そして全国で稀少になりつつある茅葺き職人との交流そして釜沼北という場において関係性が深化するきっかけになっているということである。そして茅葺き民家を民俗文化財として捉えるのではなく、生きていくための生活財として捉える林氏の考え方が、改修のサポートに来る茅葺き技術を持つ人たちやその考えに賛同する人たちを踏まえての活動となり、まさに関係人口による運動体を作っているといえるのである。

「小さな地球」の活動と御伊勢様の新たな祀り ヤマを県に売却をし、そして、屋根瓦の普及とともにヤマにあった茅畑も使わなくなり、茅無尽も行わなくなった。そして傾斜の険しいヤマの中に入っていくことも少なくなり、当然ながら山道は枝や草で覆われていく。生活空間としてヤマを出入りすることがなくなるのは、超高齢化が進む全国の農山村で見かける事象である。しかしながら、房総台風のあと、台風で荒れた釜沼北集落のすべての空間を創造的に変えていこうと意欲を持ち、林氏が一般社団法人「小さな地球」を中心に活動を続けてきた。その中のひとつに、山道を改めて整備しそして祀られていた御伊勢様を改めて祀っていこうという動きがある（【写真5】参照）。この活動も東工大、明治大学、東京都立大学、神奈川大学の学生が中心に活動している「里山デザインスクール」



【写真5】 御伊勢様

釜沼北集落の北側にあるヤマの中にある。山の神様として祀られており、ここに向かっての山道があり、集落の人たちに信仰されていたと考えられるが、集落の人たちが詣ることがなくなり、山道も次第に草木で荒れた状態になっているという。(林良樹氏提供)

による活動であり、ヤマの生活空間としての再生への取り組みといえる。

里と山の活用を考える一般社団法人「小さな地球」の活動は、里での生活を豊かにすることにある。その活動に加えて、ヤマも含めてむらにある空間的資源を今一度活かす考え方である。ここでは少し寄り道になるが「小さな地球」の取り組みにおけるヤマのあり方について触れておきたい。林氏はヤマの木々を意識して森と捉え以下のように記している。「長い間、御神木の大きな木がこの村を見守り、龍神様が住み、精霊が宿る釜沼の森に、僕はいつか人を招きたい

とっていました。それは25年前に移住した時に、僕はこの森に導かれ、いやされ、生きる力をもらい、魂が再生したからです。いのちの源である水源の森で過ごす時間は、汚れをそぎ落とし、純粋ないのちの源と出会い、今生の魂の約束を思い出すでしょう。』⁷。林氏が釜沼北の古民家に移住し、むらにある棚田を活かした里での生活を、旧来の釜沼北の人たちとの関わりを醸成させながらこれまで展開してきている。そこから房総台風を経て、新たなむら外の人たちとの関わりで茅葺きの復興を進め、そしてヤマにある森を活かす取り組みを進めていく。

荒れた山道でなかなか人が入りにくい状況になっているところを、釜沼北の水源のひとつにあたる場所の確認と、そこで信仰されていた石祠を確認するために草刈りを大学生たちと整備をし、幾久しく釜沼北の旧住民が足を運ばなかった（足を運ぶことが困難であった）御伊勢様の石祀にたどり着く。この活動においても、東工大を中心とした若い大学生、大学院生の活動により荒れた山道を確認しながら、めざしていったという。

関係人口の活動の幅を広げる取り組み 林氏の活動はNPO法人「うず」そして一般社団法人「小さな地球」の2つの法人をベースに東工大を中心にさまざまな大学と、企業では良品計画との共同企画により、多くのむら外からの人たちを交流する機会を作り、定期的に通ういわゆる関係人口を増やす活動を深めている（【図1】参照）。林氏は小さな地球のWebサイトにおいて「美しい村が美しい地球を創る。1千年続く棚田と古民家を含む



【図1】釜沼北集落の未来図である「小さな地球」プロジェクト

古民家の屋号「ゆうぎづか」「したさん」「じいた」「けいじ」を釜沼北集落を訪れる人たちの活動拠点となり、そして里にある棚田と水源のある森そして新たな茅場などを生活空間として里と山を一体化した再創造を試みようとする見取り図。（百年ゼミ2024 東京工業大学塚本由晴研究室「小さな地球」リーフレットより）

里山の時間と空間をぼくらのコモンズ（Commons/共有財産）とし、人と人、人と自然、都会と田舎をつなげた大きな輪を描き、美しい「いのちの彫刻」としてみんなで「小さな地球」をつくろう。」と記している⁸。

ここで示されているコモンズは、むらの領域を越えて人が集まり、そして里や山を共有の場として交流をし、そして深く関わるコミュニティとして捉えていくものである。都市と農山村を新たな枠組みの中で捉えようとしているものである。このコモンズについては、もとよりあった釜沼北の民俗慣行つまり生活知として存在したヴァナキュラーを再創造していることも大きい。この点については次項で記したい。

3. 再創造する民俗知、生活知—新規移住者、交流する人たちによる再発見—

林氏を中心とする「うず」「小さな地球」による、運動体としての活動はより幅が広く、本稿ではすべてを示すことはできないが、ここではもとより社会集団として存在する釜沼北集落にある民俗知、生活知を活かした活動がされていることに注目したい。林氏のこれまでの活動とあわせて整理していきたい。

屋号を使うことの効果 「序説（1）」で記したが、移住者が住まう古民家の屋号をそのまま引き継いで活用しているところが大きい。移住をしてきた世帯は、古民家をリノベーションして民泊で積極的にむら外からの訪問者を受け入れている。その古民家には、もとより屋号があり、その名称を活用している。林氏の住居である古民家は屋号「ゆうぎづか」であり、小さな地球の理事でもある福岡達也氏の古民家は屋号「けいじ」、そして和太鼓TAWOOの活動拠点となっている古民家は「じいた」そして現在ではカフェも併設され交流拠点となっている古民家は「したさん」である。

空き家になった古民家をリノベーションして新たな交流が進む拠点になっているが、古くから釜沼北に住まう人からすれば、屋号は、同じ名字の世帯が複数ある分、より個別認識の高い名称である。そこに住まう人がいなくなり、新たな移住者により生活が展開されていても、屋号で個別認識することに、むら内の人にとっては親和性が高い使われ方である。またむら外より訪れ、農家民泊をする人たちにとっても、屋号は、民泊をする個別認識として覚えやすく、長くつづく釜沼北集落の村落空間を活かした形での交流につながっている。旧来の人たちにおいても、大きな変化、しかし破壊的ではない取り組みに可能性を感じる。古くからの民俗知を活かすコミュニティづくりといえるが、戦略的であったわけではないが、もとのむら組織の有り様を尊重し、新たな住まう人通う人との新旧交流の可能性を感じるモデルともいえ、新しいむらを創造する流れになっている。

むらで行う協同労働・草刈りの再創造 釜沼全体で行う協同労働に集落内公道の草刈りがある。現在では8月の日枝神社および大山不動尊の祭礼日の直近に行われている。北と南でそれぞれの集落エリアを中心に、日枝神社を境に南北で分かれて作業を行う。各世帯から1名が参加し、欠席する場合は出不足金を支払う。最近では8月に入って最初の日曜日

に設定されている。公道での草刈りと電気柵周辺の草刈りを行うので、やや斜面のある場所での作業となる。かつては祭礼前に水源に当たる箇所や御伊勢様への道筋の草刈りを行っていたが、先述したようにヤマに入ることがなくなり、集落内の草刈りが中心である。

この夏の草刈りであるが、東工大研究室の大学生、大学院生はじめ、さまざまな大学、学校組織のメンバーが草刈りに参加をしている。「序説（1）」でも記したが、世帯数25のうち5世帯の新規移住者に加えて、交流する若い人たちが大きな力になっている。若い人たちの交流の中で2つ、むらの協同労働に関して、新たな問いが生まれたことを記しておきたい。

ひとつは出不足金についての考え方である。出席できないから代わりに金銭を支払うが、もとより釜沼においては「悪いが出られないが、これで冷たいものでも飲んでくれ」という感謝の気持ちに強い意味づけがある。出不足金の考えはいろいろであり、罰金的な要素の集落もあるが、そうではなくあえて欠席して出不足金を支払い、1年通じて最終的に集落内で出席数に合わせてむらの人たちに分配するという仕組みのところもある⁹。

その際、新しい移住世帯から見ると、超高齢の人たちが体力的に厳しく参加できないことに対してお金を払うという仕組みは、罰金的な意味が強く、このような民俗慣行はやめてもよいのではないか？という問いもいわれている。これまでのむらの民俗慣行をどのように捉えていくのか。新しい人たちとの間での問いが、現在の状況に基づいてこれから生まれてくる可能性がある。

もう1点は、ヤマをめぐる民俗慣行の再創造である。県に売却し、村の人々の生活空間から遠くなった森のあるヤマ。林氏はじめ、「小さな地球」の取り組みは、里に加えてヤマにある森を、今一度釜沼北集落の生活空間に配置する活動である。御伊勢様を祀り、森としてヤマを生かす構想の中で山間にある御伊勢様を改めて祀るためには、人が通らなくなり山道がわからないほど草木で生い茂った道筋を確認し、草刈りをする必要がある。今回御伊勢様を意識した際に、若い世代の力で御伊勢様までの山道を作っていく作業が進められていく。ヤマを売却し、生活空間としての森へ足を運ばなくなって以降、新たな若い人たちの交流により、草刈りのあり方が変わっていく。そのような動的な動きを感じさせる状況が見えてきている。

「むらに人がいないから草刈りの人手がない」「高齢でとても体力がつかないから出不足金を出す」「ヤマに入らなくなったから、もとより祀っていた神仏が忘却の存在となる」といったネガティブな発想ではなく、そこに新たなむら外の人が交流し、深く関係すること、そして里山で成り立つむらの空間を肯定的に再発見しながら、活かそうとする。草刈りというむらの協同労働慣行は、動的に問いを立てて変わろうとしているといえる。

祭礼への若い人たちの参加 農山村そして都市を問わず、祭りの担い手をどう捉え、そして確保するか。日本全体で超高齢化、少子化が進むなか、どこでも問われる課題である。鴨川市内でも、例えば川代集落においては、隣接する集落の消防団から神輿の担ぎ手として参加してもらう〔和田 2019年 65-79頁〕。大山不動尊の祭礼でも、金東集落の神輿を、

千葉大学の学生が参与して終日担ぐことも行い、また東工大塚本教授の研究室が母体となり、学生が釜沼集落の神輿を担いでいるのは先述したとおりである。それに加えて、釜沼では、学生たち主体に不動尊で奉納される神楽舞の保存会を組織化し、これまで行われていた神楽の継承につとめている。

これまでむらの外側の方が、むらの鎮守を乗せて渡御することについては、さまざまな葛藤と判断がされてきている。筆者のこれまでの調査における事例ではあるが、例えば、木更津市八剣八幡神社の神輿においては、二本の神輿棒で担ぐ「二本神輿」で知られている。しかし、いくつかの町会が二本神輿で担ぐのであるが、あるひとつの町会から、二本の本棒に添え棒を平行に着け、さらに「下駄を履かす」という言い方で本棒に直角に前と後ろに2本添え棒を付ける案が出された。神輿棒を六本にし、六本神輿にする方法である。二本棒は、体力的な負荷が大きく、体力の自信のある成人男性でも担ぐのに2分ともたないぐらいの負荷がかかる。そのため次々と交代で担ぎ手を変えていく力強い担ぎ方もある。地元の成人男性を担ぎ手として確保し、維持するかどうかとても重要な課題であった。東京から神輿会、つまり神輿を担ぐことを請け負う団体による参加も選択肢であり、各町会単位で組織されている盛年會などの青年団体に、地区を越えて担ぎ手を調整する町会もある。六本神輿にする際に、神輿の担ぎの実務を担う盛年會は、惣代会で「本棒にはさわらせないので、女性も含めて多くの人に担いでほしい」と提案して受け入れられた。神輿棒は添え棒を増やすほど、多くの人が担ぎやすく、また二本棒に比べて負担は軽い。また二本棒は成人男性でないととても体力的負荷が大きいが、担ぐ体力的な負担を軽減しながら、町会以外の人たちも参加できる仕組みにして、現時の祭礼運営を刷新している [和田 2022年]。

改めて現時の祭礼運営は、かつての常識とされ伝承されてきたことを、いかに刷新して取り組むかにある。改めて大学生が神輿を担ぐことそして奉納神楽を伝承していく組織を、釜沼北を舞台に交流し、関係を深める人たちにより継承されていくという取り組みには、大きな意味をもつ。

「むらの氏神、鎮守を担ぐのは、むらの人間である」という意識から「多くの若い人たちが関わり祭りを賑やかなものにし、継承していく」という発想が強くなる。祭礼に関わる若い人たち、特に交流している大学生の存在が、祭りのもつ意味を刷新していく取り組みであるといえる。

茅葺きと御伊勢様を通じたヤマの発見 大学生が、茅葺きが行われていたときの記憶、経験のある古老への聞き取りをもとにした卒論を書く。実はこの行為が、釜沼北集落におけるサトとヤマの関係を再認識するきっかけのひとつとなっていると位置づけられる。茅葺き屋根がなくなり、ヤマにあった茅畑も無用の存在になっていく。しかし茅葺き屋根のあった時代の語りを通じて、ヤマが生活の中で重要な資源を保持する場所であったことが再認識され、交流し関係を深める人たちにおいて再創造されていく。釜沼北に住まう人たちが所有していたヤマは県有林になり、その売却を原資の中心として集会所が作られ、集

落運営の一助となる。茅葺きの聞き取りはもとよりあった釜沼北にある財産としてのヤマの発見ともいえる。「小さな地球」がより多くの人たちの交流を通じて、棚田を中心としたサトから、さらにヤマへと世界が広がる。交流したむらに関わり関係を深めていく人たちによるむらにあるヤマの再発見といえる。

その文脈で考えると、かつて水源として祀っていた御伊勢様に向かう山道の整備もヤマの再発見といえる。もはや御伊勢様まで足を運ぶことがなくなるのは、超高齢化が進む中では体力的には厳しく必然の流れであった。そして山道は利用しなくなれば、藪と化し人が立ち入りにくくなり、生活の場からは遠くなっていく。「小さな地球」では、ヤマにある森も交流の場として再創造していく計画である。ヤマを通じての森の再発見と再創造。このきっかけに若い大学生を中心とした活動が釜沼北というむらが、新たな生活空間に刷新されていく未来を感じるのである。そのきっかけは、実は釜沼北にあるさまざまな民俗慣行の発掘と見直しという点に、交流人口そして関係人口が尊重しながら関わっていくところに大きな意味があると思えるのである。

4. 小括—これからも動的に変わる社会集団としてのむら—

交流人口、関係人口と民俗慣行 釜沼北と深く関わり交流するプロセスの中で、もとより立地する農山村に存在した民俗知と生活知の再発見の意義について検討をした。生活知は、今も生きて使われているものであり、また過去に存在した民俗慣行含めての民俗知は、農山村の未来につながる知識であり、生活を再度発見する術ではないかというところを整理してまとめとしたい。

まず、農山村における「交流人口」「関係人口」のかかわり方である。「交流人口」「関係人口」とされるむらの外からの訪問者は、ツーリスト¹⁰として捉えられるが、その概念を深化させていく流れが現代にはある。一回性の訪問からより深く関わりながら、自分自身の故郷ではない場所に何度も訪問し、新たな居場所を見つけていく。ツーリストは単なる旅行者ではなく、むら外からコミュニティに関わっていくことで、むらのコミュニティにも化学反応を起こす存在である。交流していく人たちを増やすことは重要であり、そのきっかけを作ることで、都市と農村の交流を促進させるきっかけになる。棚田オーナー制度に参加するというきっかけに、農山村と交流していく入口にしながらも、時間をかけて農山村に通いながら関係を深めていく。田植え、草刈り、収穫などに通いながらも、農山村の事情を知るきっかけをえて、さらに深めていく。実はそのプロセスには、もとよりあった民俗慣行も含めての民俗知、そして現在を生きる上での生活知としてのヴァナキュラーを知ることが重要なのではないだろうか。

民俗慣行を文化財としてではなく生活財としてみる観点 民俗学というディシプリンから見た場合、対象とする民俗慣行、伝統的とされる祭礼行事は「文化財」として捉えてしまう視点がある。民俗学研究が社会との接点を意識するとき、文化財保護という観点は、

重要である。ただ、2018年の文化財保護法改正により、保護よりも活用を意識したものに文化財が捉えられたとき、「文化財を保護する」という問いは、「それは活用できる文化財か？」といういわれ方の中でこの課題に取り組まなければならないし、ここ数年の文化財軽視の政治の状況を見ていると、そこは感じる¹¹。

茅葺きの再生を行うというプロセスについては、林氏は「茅葺き屋根を修繕し、多くの人が集まり新たなユイを作り取り組み、茅葺き屋根は文化財ではなく「生活財」として活かしていきたい。」と語るが、そこに文化に対する考え方に大きなヒントがあるように思える。すでになくなった茅畑、屋根瓦にかわっていった古民家の中で数少なく残った茅葺きの古民家。これを文化「財」としてではなく、生活「財」として、交流する人たちそして深く関わっていく人たちとともに、新たな発見をしていく。「昔、茅葺きだった」というところから「茅葺きを再生していきながら、新たな生活を考えよう」には、民俗知の再発見と生活知の再創造を感じる。

ヴァナキュラーの発見とむらの再創造 実は民俗慣行を現代的課題で捉え直すとき、むらに交流する人たちそして何度も通い関わる人たちは、通うむらという場における生活知、民俗知と関わることで交流が深まると、筆者は考える。つまり民俗慣行に付随する民俗語彙の意味に気づくことは、生活に根ざした言葉の再発見につながる。イヴァン・イリイチがいうヴァナキュラーの発見である。ヴァナキュラーは、日本語に転換しづらい概念ではあるが、そこに住まう人たちによって共有され使われる（使われた）言葉であり、そこに根ざされた古くから伝わる民俗知を含めての生活知の表象と解釈できる。イリイチは、「ヴァナキュラーなことばは実際に使われることで広まっていく。それは、日々の生活の中で語りかける人に向けて、伝えたいことをいい、いいたいことを伝える人々によって学ばれるものである。教えられる言語の場合はそうではない。」[イリイチ 1990年 152頁]と述べている。すでに使われなくなった旧来より存在した民俗知および生活知であるヴァナキュラーな語彙が再び使われていく。古民家にかつて住んでいた居住世帯の屋号を使って、むらの空間認識を新旧の人たちで共有できる再創造。そして茅葺き屋根の修復から始まり、かつて茅畑があったヤマの再発見と森を生活空間として意識していく行為は、まさに、ヴァナキュラーを通じて創り上げる、新たなむらの生活空間刷新を感じる。

またイリイチは「ヴァナキュラーな言語は互いに会話に組みこまれた完全な人間交渉によって生み出されるのにたいして、教えられる言語は、あたかもおしゃべりという仕事を割り当てられたラウドスピーカーと同調であるといえる。」[イリイチ 1990年 153-154頁]と述べている。ヴァナキュラーな言語が、交流人口、関係人口が交差していく新たなコミュニティの中で、新たに使われ、意識化されて使われることが、刷新されるコミュニティの創造につながる可能性がある。

屋号を新たに使い、御伊勢様へのお参りを再興し、山道を整備する。そして茅葺きを記憶している話者の語りをもとにした卒業論文を作成する。外部から来た人たちが、釜沼北集落のヴァナキュラーを再発見し今一度再構成していく流れに、限界集落では括られるこ

とのない、むらを新たな生活空間として活かす可能性を感じるのである。

作野広和は「とりわけ農山漁村地域では、過去の伝統を維持しつつ、急速に変化していく現代社会の生活様式や生産様式に対応していかざるを得ない。そのためには固定観念に捕らわれることなく、新たな感覚やアイデアを身につける必要がある」と述べている〔作野 2019年 11頁〕。新しい生活様式に対応していくことと過去の伝統を接続させるところに、交流人口、関係人口そして移住に関わる新たなアイデアが、存在する。関係人口と交流人口、移住人口にあたる人たちによるコミュニティのあり方は、かつて存在した伝統的な生活様式を掘りおこしながら、新たな生活を実践していけるのではないか。農家民泊に使う古民家を屋号で表象すること、かつてヤマとして生活の重要な空間であった茅畑や水源にある石祠の再認識。交流し関係を深める大学生の活動が、活かされている例であるといえる。農山村が、動的に変わるには、若い世代が必要である。そこに住まうということだけではなく、移動する、交流するということのしかけが必要である。指出一正は、近年増えてきている若者の農山漁村への関わり方について多くの事例を取材紹介しているが、その中でも若者の農山漁村への関わり方について「地域の人たちとの関係を大切にし、細やかな配慮をしながらローカルで暮らすということをしている。」と述べている〔指出 2016年 55頁〕。もとより住む人たちの生活に埋め込まれたヴァナキュラーを大切にすることも、細やかな配慮として働いているのが釜沼北集落における状況であると、筆者は思う。

農山村にとって、現在の状況をそこに長く住まう人にとって出てくる感情が「あきらめ」である。田中輝美は、関係人口を増やしていく施策を記した著書の中で「地方にとって、消滅とまで言われるほど人が減り、何かしようと思っても力が足りないこと、その結果、住んでいる人の心の中にあきらめが大きくなっていること。地方は、体力面、精神面、ともに危機に直面していると言うことができます。」と述べている〔田中 2017年 32頁〕。

この「あきらめ」という感情をどう解消していくべきか。人口が増えることは難しい。まずはそのむらに埋め込まれた民俗知、生活知を再発見しながら、それを大事にしていき、新たな関係性をつくることが重要であると思うのである。

課題としての「発展」「開発」と仕合わせ 農山村にとって、経済活動が向上していくことは重要と考えるが、それと同時に「発展」や「開発」は、そこに住まう人にとって、そして交流し関係を深める人にとって、仕合わせにつながるのか？という問いも考えるべきである。そのためには、発展、開発の概念を考えていく必要がある。そして第一義で考えるべきなのは、何かしらの世代継承である。そして都市と農山村を流動しながらもむらに関わっていくことのあり方である。二地域居住の概念の刷新といえる、より緩やかな流動である。移住、定住は、なかなか重たい決断でもある。だからこそ、何度も通う場と機会を設け、人々の動きを作ることに、これからのローカルイノベーションの未来があるのではないか。存外古くからのコミュニティが培ってきた民俗知を文化財化しない、生活財として取り組めるかという試みに、今後のむらのあり方に大きなヒントがあるのではないか。

生活知としてのヴァナキュラーな言語とローカルイノベーションの関わりについて、今

後も継続的に考えていきたい。そして発展や開発に縛られない仕合わせな空間のあり方について、農山村から考えていきたい。

謝意

筆者は、林良樹氏はじめNPO法人「うず」そして一般社団法人「小さな地球」のみなさまの意欲的な取り組みに感化され、長い期間交流をさせていただき、さまざまな活動について、常にご教示いただいています。改めて「うず」や「小さな地球」で運営に関わるみなさまからのご教示には、心から感謝申し上げます。

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費補助事業基盤C「新規移住者と旧住民による新たな村落コミュニティ構築に関する現代民俗誌的検討」（課題番号22K01090）の研究成果の一部である。

【引用文献】

- イヴァン・イリイチ、(玉野井芳郎・栗原彬訳)『シャドウ・ワーク 生活のあり方を問う』1990年 岩波書店
- 鴨川市史編纂委員会編『大山のあゆみ』鴨川市教育委員会 2002年
- 作野広和「人口減少社会における関係人口の意義と可能性」(経済地理学会年報 第65巻 2019年 pp. 10-28)
- 指出一正『ぼくらは地方で幸せを見つける』ポプラ新書 2016年
- 田中輝美、シーズ総合政策研究所『関係人口をつくる一定住でも交流でもないローカルイノベーション』木楽舎 2017年
- 多田治『沖縄イメージを旅する 柳田国男から移住ブームまで』中公新書ラクレ 2008年
- 和田健「ムラヅキアイに見られる現在の枠組みの再編成—茨城県牛久市におけるツボツキアイ・クミアイヅキアイの事例を通じて—」(歴史人類学会編・発行『史境』42号 86-103頁 2001年)
- 和田健「村入りを促進し新旧住民の新たなつきあいを構築する民俗学的方策の覚書」(千葉大学国際教養学部編・発行『国際教養学研究』3号 65-79頁 2020年)
- 和田健「八剣八幡神社例大祭運営奉興を通じてみる町づきあいの諸相」(木更津市史編纂委員会編『木更津市史研究』5号 41-50頁 2022年)
- 和田健「移住者によって創造されるむらの協業関係—釜沼北民俗誌序説(1)—」(千葉大学国際教養学部編・発行『国際教養学研究』7号 1-18頁 2023年)
- 房総タウン. NET (2024年9月1日閲覧) <https://bosotown.com/archives/7358>
- NHK奈良Webサイト (2024年10月1日閲覧) <https://www3.nhk.or.jp/lnews/nara/20240710/2050016463.html>

【註】

- 1 筆者はこれまで、1990年代の事例として、新旧住民のコミュニティを祭礼の場で再創造するため、旧来のむら組織にあった冠婚葬祭の組合を分離して「冠婚葬」の組合と「祭」の組織に分割し、後者の新たな組織には新住民もむらの祭礼に参加しやすいようにした仕組みを作った例を取り上げた [和田 2001年]。また2010年代の事例として、木更津市を例に、新興住宅地に居住する新住民にも町内会費のなかに祭礼費を含めて集め、旧町に限った町場の祭りではなく、新旧あわせて創るみんなの祭りであるというアイデンティティを、氏子総代側が作り、また旧来の住民で体力ある男性でも難度が高い二本神輿の担ぎとは別に、外部の担ぎ手を呼んで、ゲタをつける六本神輿にして参加しやすいような取り組みをしている例を取り上げた [和田 2022年]。祭礼の維持という観点で考えると、課題は、旧来のむら組織の住民だけでは維持できないことである。それも経年で見えていくと、課題がそれぞれ多様になる。本稿では、別の角度で2020年代にみられる新旧のつながりのあり方について考えたい。
- 2 作野広和の整理によると、関係人口という概念は2016年から2017年にかけて広まった概念であるという [作野 2019年 12頁]。農山漁村の課題に関心を持ちそしてその地域に関わっていく人たちは、「移住する」「移住しない」の二項対立的な見方ではなく、移動しながらも深く地域と関わっていくことを継続的にしていく関係人口のあり方について考えていく流れにある。
- 3 1889年（明治22年）の町村制施行により、大山村が誕生する。金東、佐野、奈良林、釜沼、古畑、平塚の旧村が合併して成立する。当然ながらそれぞれの旧村で祀っている氏神は存在し、その6つの氏神の祭礼を結集して行われるのが、大山不動尊の祭礼である。6つの旧村の神社は、平塚は八幡神社、金東は八雲神社、古畑は諏訪神社、奈良林は三嶋神社、佐野は八幡神社、そして釜沼は日枝神社である。
- 4 大山不動あるいは大山不動尊の名で人々からは語られる高蔵山大山寺は、724年（神亀元年）に良弁僧正が開山したと伝えられる。大山不動は、修験寺であったこと、雨乞いの霊地として厚く信仰されていたことが重要である。また関東三大不動のひとつといわれるが、三大不動は他に成田山新勝寺（成田不動）神奈川県伊勢原市大山寺（相模大山不動）、東京都日野市金剛寺（高幡不動尊）など3つ以上が語られている。諸説あるが、共通しているのは不動明王の信仰に基づいたものであり、大山不動も修験寺であったことが背景にある行事が現在も行われている。
- 5 森林、林などの呼称はあるが、木が生え茂り傾斜のあるエリアは、ヤマと呼ばれることが多い。釜沼でもやはりヤマである。本稿でも居住エリアから離れている森林そして居住エリアの中にある木が多く存在している場の両方を、ヤマと表記していくことにする。
- 6 筆者の取材調査での例であるが、茨城県牛久市久野町久野集落では、周辺の集落と共同で利用する集会所をもっていたが、当時牛久霊園で牛久大仏の建立のため、用地の買い取り交渉にあたった寺院側に対して、久野集落では用地の売却とともに、集落の集会所を要望し建設されたという。また茨城県坂東市木間ヶ瀬集落においても、近隣の集落で共同所有している集会所を使っていたが、木間ヶ瀬集落単独の集会所建設をめざし、さまざまな補助金の交渉を進めていったことがあるという。集会所をもつということは、ある意味、集落のアイデンティティを示す象徴的装置であるといえる。
- 7 リーフレット「SMALL EARTH 小さな地球 近自然森の誘い」[2024年 2頁]
- 8 <https://small-earth.org/> (2024年9月24日閲覧)
- 9 例えば同じ鴨川市にある川代集落では、水源周辺の草刈り作業があるが、むらの人たちがすべての草刈りの機会に参加する必要性はなく、自分の家が使う水源周りの草刈りは必ず出席し、後は都合に合わせての参加でよく、欠席をあえてして出不足金を払って、2月11日に行う部落総会で、出席

に合わせて配分、つまり払い戻しを行う。このように集落により、協同労働による出不足金の持つ位置づけは違うものである [和田 2019年 65-79頁]。

- 10 多田治は、ディーン・マッカネルの著作“The Tourist”の概念をもとに以下のようにツーリストの概念を示している。「ツーリストは単に、観光という特定の領域に限定された、一個人にとどまらない。ツーリストとは、近代という時代に生み出される、歴史的・社会的な存在でもある」[多田 2008年 35頁]。現代の農山村に対して、ツーリストは、超高齢化、少子化の中で、社会集団としてのむらを刷新させていく力をもっていると、筆者も考えている。むらの内や外でいう、単なる外の存在ではなく、そして一回性の訪問者ではなく、関わりを持っていく存在として捉えていくことが必要である。
- 11 2024年7月、奈良県立民俗博物館に収蔵されている「民具」の扱いについては、奈良県山下知事が、今後収蔵品の価値を検討し、廃棄するものはしたいという考えを表明した [NHK 2024年7月10日配信]。このことで「文化財として民具は捉えられるのか」という問いが世間には出てきた。民俗資料の文化財的認識は、所与のものでもなく、また普遍的な概念とも言いがたいという現代的課題が出てきたことは間違いない。これまでの文化財を保護する観点は最重要ではあることは変わらないが、文化財という括りにとどめない言説が必要になってきていることも間違いない。林氏のいう茅葺きを過去の文化財としてみるのではなく、生活財として考えるという問いは示唆深い。